へ13
3703
15

口中御藥 固齒散 大包代 白銀 一匁代 二十 銀

精製 白妙 世二銀

寢小便大奇藥 包代 三百 銀

無病長壽 養生千引草 全一冊 京山翁著 廣重画

美玉百人一首 中本形 全一冊

紅梅百人一首 半紙本 全一冊

雛鶴笹易壽 紅摺大本

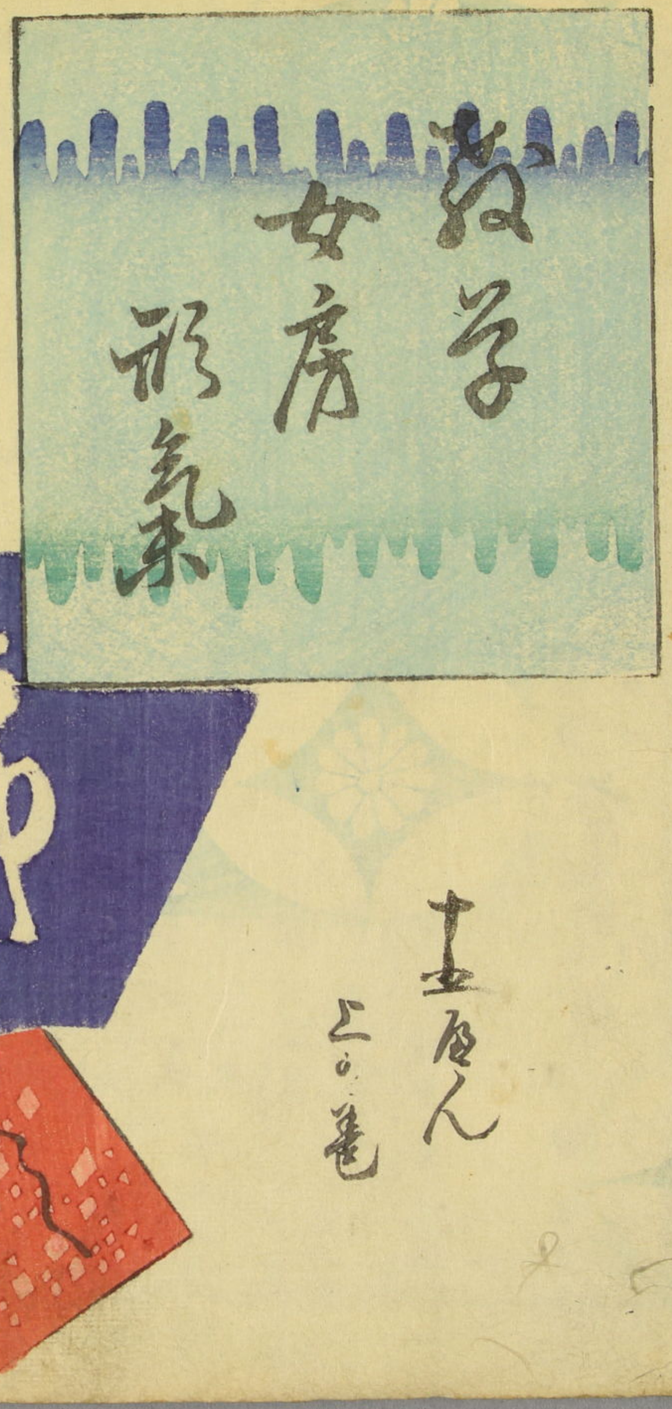
女中用文玉手箱 中本形 京山翁著

敵討白石噺 全二冊 芳虎画録

伊賀越敵討物語 全二冊

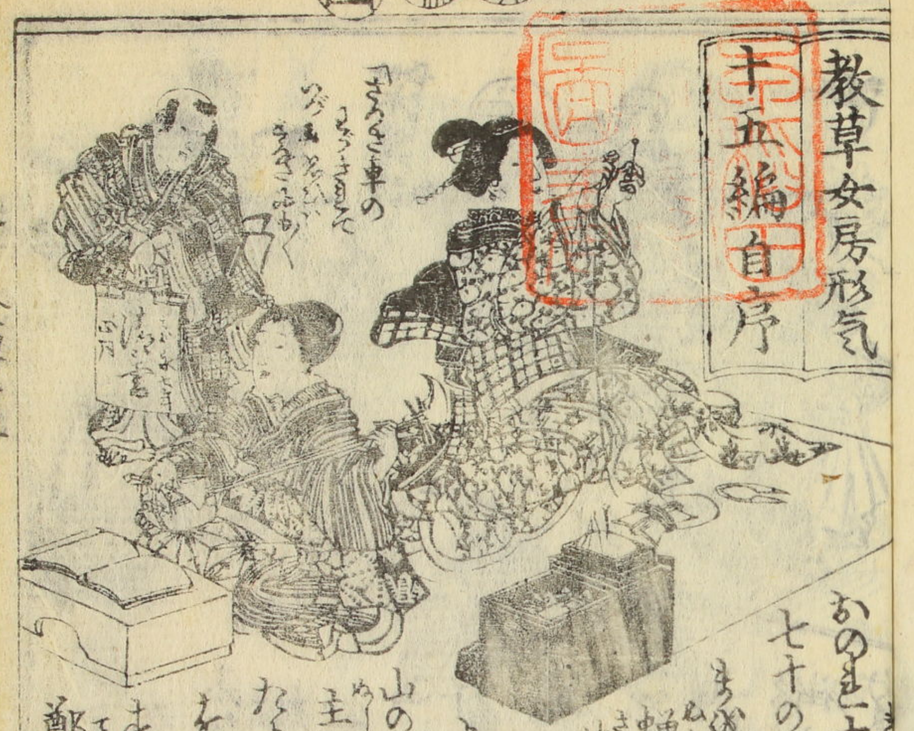
源家武勇鑑 一編 秀賀板台 三編 芳虎画録

足利絹手染紫 編金作 三編 國貞画



十五人

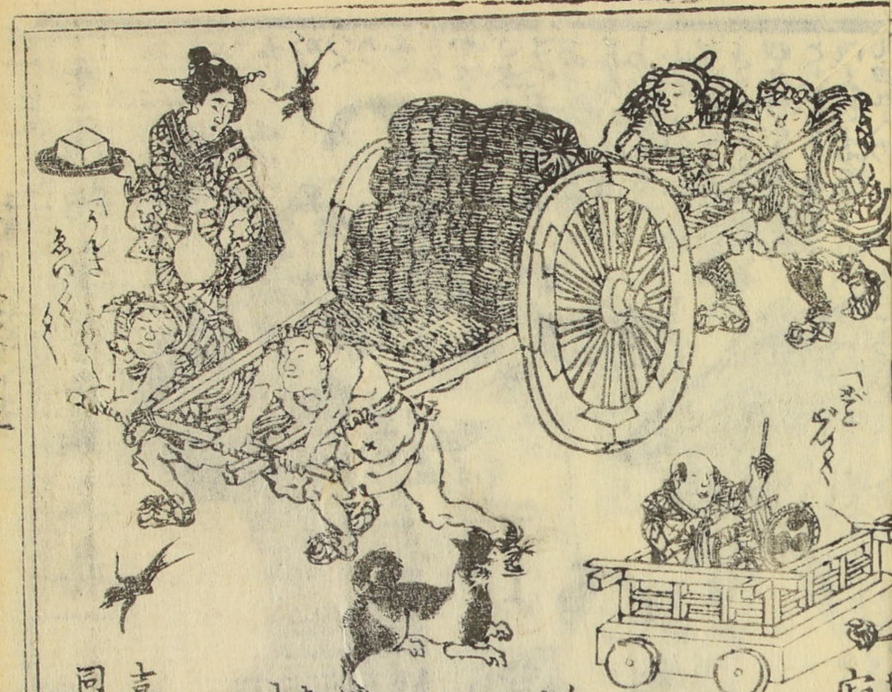
門 へ13
號 3703
巻 15



教草女房形気十五編自序

おの是京山唐人の稀なりといひし七十の時なほ浮世を仕舞てあさ紙九ゆ五寸米ゆ腰を折る袴を蝉蛻て袖なし羽織ゆ投頭巾猿も拾ゆ渋柿の身なれ是バ山ゆ入らんそハ殺ゆ踈く水ゆ入らんさん船ゆ嫌なりかなりなを山の奥なりなをと詠こる哥まを地主とたのみ土蔵の後ゆ巣を造りなる方丈の鼠壁猫の額などなるを書齋も茶室もなくの人ゆ任あぐ〜土一升金一升の地面なをバ鄭老ゲ七松も庚ゆえぞ陶隱ゲ五

柳の門ふる蟻穴の一亭ふ献之
の竹ハ植つるぞも舌切雀の家今
ふたらぞお宿ハ何所やと訪る人の
無いるるく小閑寂の小自在庵
釜ふ山林の松風を閉瓶花ふ浮世
の春を知る柴の戸ちろ〳〵ふる
らが朝ゆゆの音曲も耳を
ぬるバ隣の庭の蟬の声もしやや
駒ふく鈴の音車ふる掛声松魚
やく犬のかゝみあひ児曹が持ぶ太
鼓の音婆ゞが幼化のくゝ紅市喧
街嚷僅ふ牆一重を隔てかゝくし
ぬるどき時ふ夜時の鐘ふ近ハ四隣



寂として声無く稍々韻士の時至りて
心ちづりく燈火ふ對して文を綴る
ふハ筆を採るかくて在歴なる家
九めより十五年の夢らもぐ不覚
今年八十五歳ふ成りてふ猶乳汁
臭草きりしの筆を棄ざるハ家家
ふ三編四編五編拾ひ集めて三百三
菩提とぶ夢うや現世うやと梅
がえゞ異見の種をまゝく歳々
生る教草女房形気の十五編ふ
華と拭ひね

嘉永六丑三月稿成　八十五歳
同七寅　初春発市　京山

女房形氣十五編上卷

万ろく
おみよ
今はなさんおあね
「おでさんおあねさんと
おまへ
おさの
ほ」
「おたアさん
あぶーらふ
あぶらとの
わく
初段

つまおうる

四 あるものの一今きろしるうをこんぶこ
ひとあうむかのふをこんちりめんの
下ぎごろもぜんまのあぶ
かりんのこさの豆たあり
あぶふさーるつくだげの
なんこの豆たきんさらさ
かるめいぎんのいろ水
のこをとごろうくざへ
きんむくるあをの紙
あうをぢめ金まる
めうつい

五

玉の一をぢ

ぬりや六兵衛

二 かくめちへ十九
のうをとるいして廿七の
さんだけとるり十三の
せぶまをかりそをそくこころ
ごけをこそまざいをこうさぼ今八
せぶまふあもきるあちなんど
ぬけあく男まさうの女あ
くこうやをい人もあるの

三

二段

とのをぢのおみよ一八六十ふ
ちうけをぢるさやうがよきやあ
まごろぐとこるえぢーさせんぐいの
万ざえかんがいのとそあのーをどる

一

あとせバ
よのふ
をもふ
ろうよト
とそ一七
の万おうを
あとさをうを
あうハをめ
さぐさをそ一ちの下ふ
万太ゲさうやをそうするうち
おいとハうゆつけうこゆいせん
とまるところへ下女きう
「ぐんみさる
をぢどさる
かのでみされ
ちーとこちう
せるにろようをのの
かみようきうけり

久さく
ちんろ
上せい

歳の一
でしの
あんま
三ろの八や
の西
玉の一
ぢーぐら
ろの一

三段

四段

孝子太郎母

おとこの女房

おとこ女の時

寺子屋図

五段

(三)おきたがうの
ひいでしと
ぞうろうきまた・いと
かろうどでいるのぶ
あもいぬがあっていろ
うちまらよ(さえ)(三)

(四)あのちいち
だのごろうめ
たべでいんきよ
おそいくろう
ろう
おらと

六段

かくて
あくるロ
万ぎくさんあさ
よりおでらりゆーたへ
らそけまべおらと
ふまーしてをちうあ
てうあう平六をよび
よせ小ざーたへ。そまてい
あひけまべ平ら
みろっあ
あひ
よのとい
そろ
あろうぬ
ああ

万ねつつよ
ゆびちおを
ぬこあいん
きよへ妙

ゆーや。いと「ろう
でらあのびおへこさあ
のあうあうくいと
おいちびのようあ
のねびひ又い
うひてきてこを
ろる玉の一び
とをろう
一ようどあうむ

又ありやこあうあ
よそむこちの人の
うれびのうく
うびませけんの
ぬちあうりて
又をのびとい
ぶんもころう
かへをきんの
あうっぬゆうあ
ぬをくん玉の一び
ぬをきるあうこい
ぶさんをまあう。
平六おへをあれ
てもうのでいあうう
おいとおいまへあうて
のこあうここーびと
ぬまそあびこんうきあみ
あいせさあへきんそのの
ーあびーあ玉の一びあを
ひんさてとあもいまそんざん
れんでぶんをこーびこの
りへのあんさへとありうひみさ
みだんのあ下女あわうんを身と
あのしいおへをきあの身りちび
ろうへあをとべんあもあり。一

二 ぎうもあるあてこをこーの
なのこんあちこちのちを

玉の一

ちあも
あうさ
ゆまこ又りや
玉の一でハ
ちの
人のうあび
あどまる
ーやあうそ
かへをきあへも
ーこーびうちうひと
あうきまで玉の一びんも
きうこん。平六うでびを
あうるーあをうどんの
さあのうーあもこ玉の一び
ぬをきうハざうさも
あのうーあちう
ぎうの一下

ようこーび
かとんん

うちねを
なちてんを
うーきんかいと
うれこて。平六「まををー
ゆる玉の一びハをくうう。ゆあつーや

玉の一をぢ
ぬらや六べゑ
七段
六べゑつま
おとる
玉の一
此本の表のうち下の巻みあり

京山老人作
國貞画
教草女房形気十五編上之巻終
教草女房形気十五編下巻
八段
玉の一
あらら段平

ねるや六べゑ

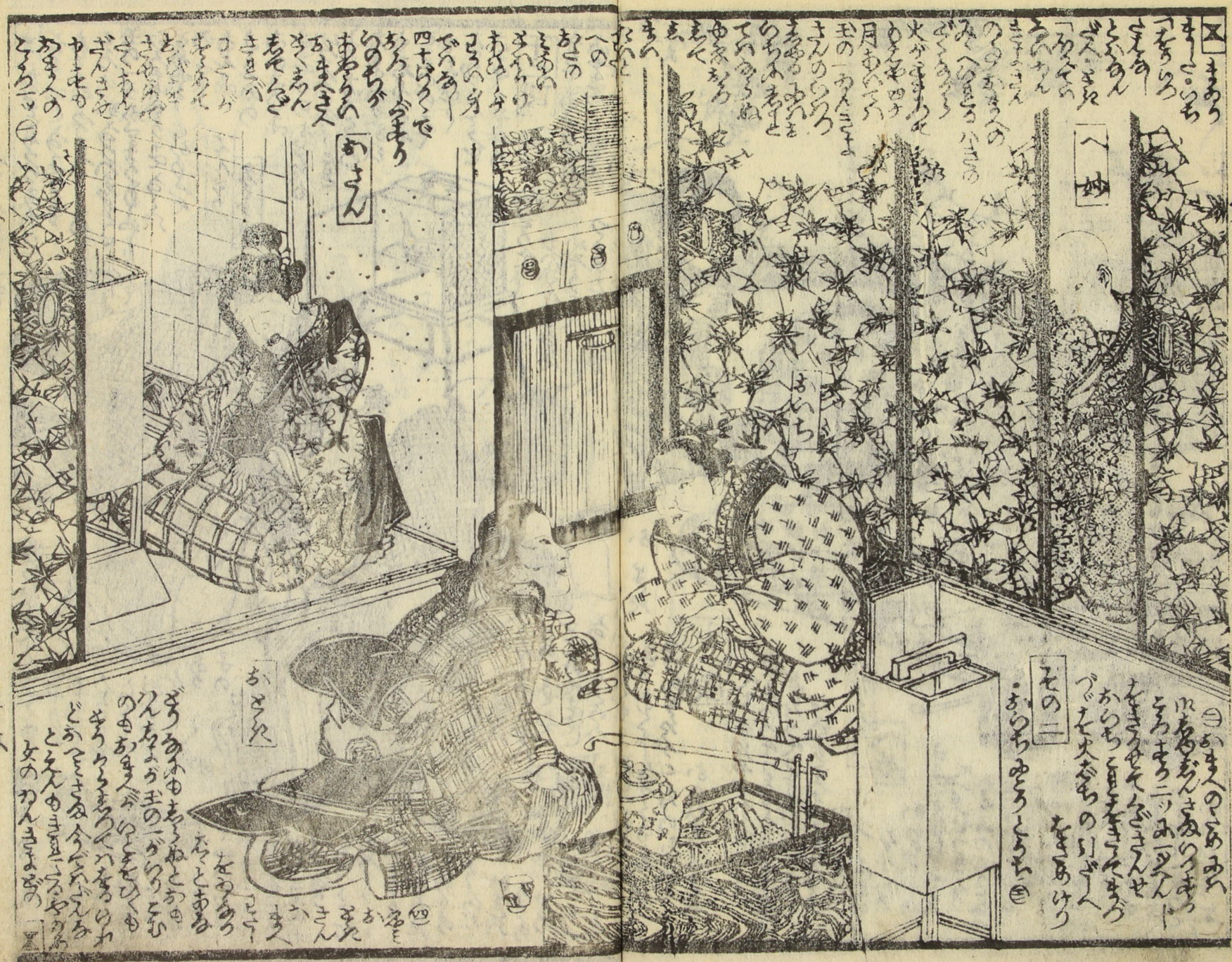
孝子太ふ奴母

おいち

おさと

十一段

おつま分ハ



その二

十三段

十四段

ゆえのちかへみ

十四段

京山老人作

梅蝶樓國貞画

教草女房形気十五編下美終

女房あり十六編より出板仕い

春閑鶴目録

御所櫻梅松録 六編より 鶴亭秀賀作 十二編より 梅蝶樓國貞画

花の下の遊びの続き 貴之助初戸根園の社 重梅御前病気の一段 九編八松の前花の工夫 調代女八重梅の前 十編 迎去る君御愁傷の譚 十一編 三人竹零落又八若君梅の本御再誕

御所奉公 初戸日記 十二編 應賀作 六尾芳虎画

教草女房形気 三編 秀賀作 五編 國貞画

花袭狐草紙 三編 曳笛文作 五編 芳虎画

菫繪解國噺 四編 曳笛文作 五編 芳虎画

庄 地本錦繪問屋 錦橋堂 山田屋庄次郎板

江戸南傳馬町二丁目